第 18 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入 賞 作 文 集



（第 37 回近畿ブロック少年少女北方領土研修の様子）

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目　次

		頁
1	発刊にあたって	1
2	実施要項	2
3	入賞作文の選考について	3
4	入賞者一覧	4
5	授賞式風景	6
6	歴代最優秀賞受賞者一覧	7
7	京都府北方領土教育者会議について	8
8	京都府北方領土教育者会議の取組状況	9
9	入賞作文	10
	○最優秀賞	
	京都府知事賞	京丹波町立蒲生野中学校　長谷川　咲
	京都市長賞	京都市立下京中学校　田中　周
	○優秀賞	
	京都府教育委員会教育長賞	南丹市立殿田中学校　船越璃子
	京都市教育長賞	京都市立嵯峨中学校　潮海咲良
	北方領土問題対策協会理事長賞	舞鶴市立白糸中学校　土居きずな
	北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立久世中学校　松尾昴
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	南丹市立殿田中学校　楓るり
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立音羽中学校　樋口月明
	京都新聞賞	京都府立須知高等学校　谷垣帆乃香
	京都新聞賞	京都市立嵯峨中学校　山室仁花
	ＫＢＳ京都賞	舞鶴市立白糸中学校　村田美月
	ＫＢＳ京都賞	京都市立洛南中学校　後藤崇志
	○佳　作	京都府立福知山高等学校附属中学校　吉田陽希
		南丹市立園部中学校　安達唯愛
		南丹市立八木中学校　田中楓珈
		京丹波町立蒲生野中学校　中川向日葵
		京丹波町立瑞穂中学校　川淵莉未
		京都市立嵯峨中学校　齋藤穂
		京都市立嵯峨中学校　寒川沙歩
		京都市立勧修中学校　谷口桃菜
		京都市立下京中学校　中田悠晴
		京都市立久世中学校　上田真嗣

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも、今回で十八回目となりました。第一回は四〇四点の応募からのスタートでしたが、第三回目には一九三八点、それからは毎年千数百点を越える作品の応募がある背景には、多くの皆様の深いご理解とこの問題に対する熱い思いがあったからこそだと、心から厚くお礼申し上げます。

さて、近年の世界情勢は一層の深刻さを増しています。令和四年二月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は終わりが見えず、領土問題の解決に心血を注いできた元島民や多くの日本人に深刻なダメージを与えています。そこに加えて起こったイスラエル軍とイスラム原理主義組織ハマスの軍事衝突は世界に大きな衝撃を与えました。しかし、この問題も、悲劇の蓄積により解決への見通しが全く見えない状況で、戦後一貫して国際平和を希求し続けてきたわが国で成長してきた生徒たちにとっては、想像すらつかない事態が毎日起こっています。

今回の作文コンクールに寄せられた中学生・高校生たちの文章には、北方領土問題とこれらの問題を重ね合わせたものが多数ありました。たった一人の力では何もできないかもしれないし、今の自分は無力かもしれないけど、それでも、人が人としてあたり前の生活を送るために、世界中の国々が解決の見通しを持つことができない課題に対して、自分にできることを懸命に、果敢に考えた内容が多く見られたのが大変印象的でした。そして、北方領土問題のことを自分自身のこととして自分の中に落とし込み、自分ならどんな気持ちになるだろうか、元島民の方々の思いはいかばかりかと心を動かしたことにより、これまで当たり前に過ごしてきた環境や周囲の人々への感謝や、学び続けること・考え続けることの重要性に気づき、自分自身を成長させたことを、京都府知事賞を受賞された京丹波町立蒲生野中学校の長谷川咲さんや、京都市長賞を受賞された京都市立下京中学校の田中周さんの作文から読み取ることができました。

このようなことから、中学生・高校生といった多感で感受性が豊かな時期に、北方領土問題を知り、深く考えることは、非常に大切な学びであることを実感するとともに、本作文コンクールが果たす役割の大きさを改めて考える機会にもなりました。これまでも、関係者の皆様には多大なるご理解とご支援をいただいて参りましたが、今後も一層のご支援を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんや、ご指導くださった各校の先生方に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、ＫＢＳ京都の皆様をはじめ、関係の皆様方に厚くお礼申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

令和六年二月十日

北方領土返還要求京都府民会議
会長　石田宗久
京都府北方領土教育者会議
会長　平井祐子

令和５年度
第18回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

１　趣　旨　　京都の中学生や高校生等が、北方領土が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

２　主　催　　北方領土返還要求京都府民会議　京都府北方領土教育者会議

３　後　援　　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会
（独立行政法人）北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局
ＫＢＳ京都

４　テーマ　　「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

５　募　集　（１）対　　象　　京都府内の中学校、高等学校、義務教育学校並びに特別支援学校に在学している者
（２）募集期間　　令和５年６月28日（水）～12月８日（金）
（３）作品規定　　原稿用紙（400字詰）３枚程度
（４）応 募 先　　京都府北方領土教育者会議事務担当
〒629-1192　京都府船井郡京丹波町本庄ウエ16
京丹波町教育委員会　小森宛　TEL 0771-84-0028

６　審　査　　主催者において選定した審査員により審査

７　表　彰　（１）賞の設定
最優秀賞　２点・京都府知事賞・京都市長賞　各１点
優 秀 賞　10点・京都府教育委員会教育長賞　１点
・京都市教育長賞　１点
・北方領土問題対策協会理事長賞　２点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞　２点
・京都新聞賞　２点
・ＫＢＳ京都賞　２点
佳作・入選　若干点

（２）表彰式
令和６年２月上旬
（北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定）

８　その他　・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。
・最優秀賞・優秀賞・佳作の作文は作文集に掲載されます。
・中学生の上位入賞作品は北方領土に関する全国スピーチコンテストに応募します。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務担当 （京丹波町教育委員会　小森　誠）
	0771-84-0028

入賞作文の選考について

1　応募の状況

応募校：１６校	応募点数：１，０４０点

2　選考委員と選考基準

（１）選考委員会の構成

氏　名	役職・所属等
平井　祐子	京都府北方領土教育者会議会長 （南丹市立殿田中学校教頭）
森　　茂昭	京都府北方領土教育者会議副会長 （京都市立下京中学校校長）
山崎　直人	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京都市立嵯峨中学校校長）
田華　　茂	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京都市総合教育センター指導主事）
松島　功一	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京都市立伏見中学校教頭）
小森　　誠	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京丹波町教育委員会社会教育課社会教育指導員）
野間　慎吾	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京丹波町立瑞穂中学校教諭）
梅田　遼平	京都市立洛南中学校教諭
今村　俊之	京都市立嵯峨中学校教諭
松本　和久	京都府北方領土教育者会議顧問 （京丹波町教育委員会教育長）
西田　三郎	京都府北方領土教育者会議顧問 （京都府立林業大学校職員）
野村　啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
下村　幸児	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
法谷　道哉	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

（２）選考基準

・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
　　（正しい認識・理解の視点）
・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
　　（主体的な態度・関心・意欲の視点）
・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
　　（将来への展望の視点）
・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
　　（啓発資料としての価値の視点）

3　選考の結果　・別紙の入賞者一覧のとおり

第18回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：16校　　応募作品数：1,040点

氏　　名	学　校　名	学　年
最優秀賞（京都府知事賞）		
長谷川　咲	京丹波町立蒲生野中学校	２年
最優秀賞（京都市長賞）		
田中　　周	京都市立下京中学校	１年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
船越　璃子	南丹市立殿田中学校	２年
優秀賞（京都市教育長賞）		
潮海　咲良	京都市立嵯峨中学校	１年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
土居きずな	舞鶴市立白糸中学校	２年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
松尾　　昂	京都市立久世中学校	１年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
楓　　るり	南丹市立殿田中学校	２年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
樋口　月明	京都市立音羽中学校	２年
優秀賞（京都新聞賞）		
谷垣帆乃香	京都府立須知高等学校	１年
優秀賞（京都新聞賞）		
山室　仁花	京都市立嵯峨中学校	１年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
村田　美月	舞鶴市立白糸中学校	２年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
後藤　崇志	京都市立洛南中学校	２年

※　氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

第18回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏　　名	学　校　名	学　年
佳作	吉田　陽希	京都府立福知山高等学校附属中学校	1年
	安達　唯愛	南丹市立園部中学校	2年
	田中　楓珈	南丹市立八木中学校	2年
	中川向日葵	京丹波町立蒲生野中学校	2年
	川淵　莉未	京丹波町立瑞穂中学校	1年
	齋藤　　穂	京都市立嵯峨中学校	1年
	寒川　沙歩	京都市立嵯峨中学校	1年
	谷口　桃菜	京都市立勧修中学校	2年
	中田　悠晴	京都市立下京中学校	1年
	上田　真嗣	京都市立久世中学校	1年
入選	山口　愛依	南丹市立殿田中学校	2年
	村瀬　花春	京丹波町立蒲生野中学校	2年
	白数　海斗	京都府立海洋高等学校	2年
	樹山　來史	京都府立須知高等学校	1年
	垣内　咲南	舞鶴市立白糸中学校	2年
	柴田佳菜美	京都市立京都御池中学校	8年
	北川　結唯	京都市立下京中学校	1年
	大﨑　愛可	京都市立久世中学校	1年
	寺田　望乃	京都市立京都御池中学校	8年
	熨斗　美咲	京都市立下京中学校	1年

※　京都市立京都御池中学校は9年制で表示しています。

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

令和６年１月17日　京都府庁



西脇隆俊京都府知事、前川明範京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

令和６年１月15日　京都市役所



門川大作京都市長、稲田新吾京都市教育長から賞状が授与されました。

京都府北方領土教育者会議について

1　設　　立　　平成18年3月

2　設立趣旨　　北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。

3　会　　員　　京都府内の中学校・高等学校教員等

4　主な取組
○「北方領土と私たち」作文コンクールの実施（平成18年度～）
・第18回作文コンクール（応募校16校　応募点数1,040点）
○北方領土教育実践推進校指定事業の実施
・2校（活動支援経費10万円、授業公開、作文コンクールへの応募、教材研究、講演会等）
○各種研修会等への教員・生徒の派遣
・四島交流事業（ビザなし交流）…国後島、色丹島、択捉島
・現地視察研修会…根室市周辺
・近畿ブロック研修会…近畿各府県
○北方領土に関する全国スピーチコンテストへの参加　等

5　組織体制　　会長（1）　副会長（1）　事務局長（1）　事務局次長（1）
運営委員（若干名）

＜北方領土に関する全国スピーチコンテスト入賞者（全国で10名）＞

年　度	受賞名	氏　名	学校名
平成25	奨励賞	岡嶋良太郎	京都市立伏見中学校
平成26	北対協理事長賞	花阪　大輝	京都府立園部高等学校附属中学校
平成28	審査員特別賞	高屋　瞳華	南丹市立園部中学校
平成29	奨励賞	藤内　空菜	南丹市立園部中学校
令和元	審査員特別賞	上山　莉奈	南丹市立園部中学校
令和2	北対協理事長賞	日下部佳子	南丹市立園部中学校
	奨励賞	河原　奈那	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山下　青葉	向日市立寺戸中学校
令和3	審査員特別賞	八木梓緒音	南丹市立園部中学校
	審査員特別賞	岸本まりな	亀岡市立亀岡川東学園
	奨励賞	久保田美優	南丹市立園部中学校
	奨励賞	田中　珠生	京都市立下京中学校
令和4	奨励賞	加藤　心菜	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山口　采乃	南丹市立殿田中学校
	奨励賞	辻本　美玖	南丹市立園部中学校
令和5	2月24日に選考会	楓　　るり	南丹市立殿田中学校
		田中　　周	京都市立下京中学校

京都府北方領土教育者会議の取組状況

1　「北方領土と私たち」作文コンクールへの応募校数・応募作品数

第１回	２０校	４０４点
第２回	２５校	８９５点
第３回	３３校	１，９３８点
第４回	２０校	１，３０４点
第５回	２４校	１，９７９点
第６回	１５校	１，４８１点
第７回	１８校	１，４３０点
第８回	１８校	１，７４０点
第９回	１８校	１，５４５点

第10回	２２校	１，４７１点
第11回	１８校	１，３０２点
第12回	２４校	１，４４８点
第13回	２１校	１，５９１点
第14回	２１校	１，５１１点
第15回	２３校	１，４２９点
第16回	２２校	１，７１５点
第17回	２１校	１，６１４点
第18回	１６校	１，０４０点

2　各種研修会への参加状況　　（参加者実績：教員数＋生徒数）

年度	北方四島交流	教育指導者研修（根室市）	青少年等視察研修（根室地域）	近畿ブロック研修会（６府県）
平24	国後３	2		17（滋賀）
25		2	28	43（京都）
26		2		22（大阪）
27	国後２、択捉１	2	20	18（兵庫）
28		2		9（奈良）
29		2		18（和歌山）
30	択捉１	2	20	14（滋賀）
令１		2		48（京都）
2	新型コロナウイルス感染症のため中止			
3	新型コロナウイルス感染症のため中止			4（兵庫）ｵﾝﾗｲﾝ
4	未実施	未実施	23	15（奈良）
5	未実施	2		9（和歌山）

3　実践推進校事業指定校

年度	学校名
平成19	園部高校
	八条中学校
20	園部高校
	伏見中学校
21	園部高校
	大枝中学校
22	東輝中学校
	山科中学校
23	東輝中学校
	嵯峨中学校
24	日置中学校
	西賀茂中学校

年度	学校名
25	南桑中学校
	烏丸中学校
26	城北中学校
	中京中学校
27	和知中学校
	上京中学校
28	蒲生野中学校
	梅津中学校
29	園部中学校
	北野中学校
30	殿田中学校
	桂川中学校

年度	学校名
令和１	亀岡川東学園
	双ケ丘中学校
2	八木中学校
	開晴小中学校
3	瑞穂中学校
	久世中学校
4	殿田中学校
	二条中学校
5	白糸中学校
	京都御池中学校

入賞作文

最優秀賞（京都府知事賞）

知って変わる

京丹波町立蒲生野中学校
二年　長谷川　咲

「故郷に帰りたい」。そんな思いの人はこの世に何人いるだろうか。

そんな思いを強く持っているのが、北方領土の元島民である。その故郷を奪われた元島民は年々減ってきている。しかし元島民の人たちが「島に帰りたい」と望む気持ちはずっと消えることはない。

北方領土は旧ソ連が北方四島に不法侵入して島民を追い出し、法的根拠なく占拠している日本の領土である。現在も、元島民は島に帰れないという現状にある。

私は昨年、実際に納沙布岬を訪れ、納沙布岬から一番近い歯舞群島の貝殻島をこの目で見た。目と鼻の先にある故郷に帰りたくても帰れない悲しみや辛さと、今まで感じたことのない複雑な感情を味わった。もし自分が元島民で、目の前に見える故郷に長い間ずっと帰れなかったらと思うと胸が苦しかった。

北方領土について知ってから「パレスチナ問題」にも関心が湧いた。パレスチナ問題も北方領土問題のように多くの人が故郷に帰れずにいるという。パレスチナ人は故郷と家を失い、約七十年にわたり難民として故郷への帰還を切望しながら生活している。

この二つの問題は同じ状況に置かれていると思う。どちらの問題も今までいた場所からいきなり追い出されて故郷や家を失い、帰りたくても帰れず、故郷へ帰りたいと望む人が多くいるという共通点があると気づいた。

私は、北方領土問題とパレスチナ問題を重ね合せて、パレスチナ問題について調べてみると、北方領土問題との共通点がいくつかあった。共通点が見つかるのはそのことについて知っているからで、知らなければ考えることすらできない。

今回は二つの問題で考えたが、様々な問題でも同じことが言えると思う。それぞれの国が話し合い、互いの考えを知ることで共通点を見つけ、解決に向かえる。しかしそれは国の指導者に任されていることで、私たち一般の人には応援しかできない。だが、自分たちの国と相手の国について知って考えることは誰にでもできる。少しでも「知る」ことによって自身への変化は起きる。

私は、現地の根室に行って北方領土問題の現実の姿を知った。現地に行くまでは学校やニュースで「北方領土」という言葉を聞いても耳を通るだけだったが、研修に行ってからは「北方領土」という言葉を聞くだけで無意識に反応する。知ることによって興味が湧き、自然に北方領土への意識が高まった。私が北方領土問題を知ったきっかけは、学校での北方領土問題の講演会。講演会があったからもっと知りたいと思った。

何かに興味をもち、知るにはきっかけが必要で、多くの人に北方領土問題を知ってもらうには自らが進んで調べて知るきっかけを作らないといけない。そのきっかけの一つはこの作文を書くことだ。作文を書くことで北方領土問題を知り、考えることもでき、多くの人が北方領土問題に向き合える。私は作文を書くのは二回目で、前回との考え方に変化があった。同じことでも何度も考えるごとに考えが深まり、新たな見え方が生まれる。北方領土問題を多くの人が知り、自分たちのこととして考え、北方領土問題を記憶から消さないでほしい。だから私はこれからもずっと北方領土問題について考えていきたい。

最優秀賞（京都市長賞）

故郷の景色を見るために

京都市立下京中学校
一年　田中　周

僕が北方領土のことを初めて強く意識したのは二年前。当時、中学二年生だった姉が、何やら難しい顔をして机に向かっていた。今の僕と同様に、作文を書くため北方領土問題について調べているのだった。

僕が横からのぞいているのに気付くと、姉は大きなため息をつきながら顔を上げ、「北方領土問題って本当に大切だよ。周も知っとかないと駄目だと思う。一緒に見よ。」と言ってきた。正直なところ面倒くさいなと思ったが、色々な資料を見ていくうちに、これは大変なことだぞ、と考えるようになった。

北方領土がロシアによって不当に占拠されていること、そこではロシアの一般市民が普通に生活していること、元島民である日本人と現島民のロシア人との交流事業が行われていることをその時に初めて知った。また、同時にこれだけ交流が広がり、良い関係性を保てているのだから、この問題が解決するのも近いのではないかと安易に考えていたことを覚えている。

それから半年後…。事態は悪い方へ急転した。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を受け、日本政府が経済制裁を科したことに反発する形で、北方領土の元島民らによる「ビザなし交流」や元島民が故郷の集落などを訪問する「自由訪問」など、これまでに日本とロシアの間で結ばれた合意をロシアは一方的に破棄したのだ。

元島民の方は、インタビューの中で「今まで積み重ねてきた努力が水の泡になってしまったようで、がく然としている。」と答えている。また、「もう生きているうちには（色丹島へ墓参に）行けないかもしれない。」と不安を吐露されている記事も読んだ。

元島民の方々の平均年齢は、既に八十七歳を超える。残された時間は長くはない。四島との交流を再開し、元島民の方々が、生きて再び故郷の地を踏めるようにすることが急務である。

では、具体的に何をすればよいのか。日本政府は、「現状の日露関係のもとで北方四島の交流事業などを行う状況にはない。」と発表している。現実として、四島に渡るのは、当分は無理なのかもしれない。

では、仮想の世界ではどうだろうか。故郷の景色を映し出したバーチャルな世界を見ていただいたら、少しは慰めになるのではないだろうか。当時の写真を集めて、占拠される前の故郷を再現することだってできる。

いや、やはり違う。コロナ禍で外出が制限されていた時、僕はよくマップのストリートビュー機能を使って、島根にある祖父母の家やその周辺を見て回った。行きたいのに行けない、その寂しさからだ。画面を見ていると、本当にその場にいるかのように感じられる。進みたい方向に進んで、見たい景色を見る。だが、何かが違う。光の当たり具合や、潮を含んだ風の匂い、鳥のさえずりや木々のざわめきなどが何も感じられないのだ。そのためにかえって寂しい思いが募ってしまう。

仮想は仮想でしかない。こんなことくらいしか思いつかない自分の不甲斐なさを痛感する。しかしながら、今回、色々な資料や記事を読んで得た、北方領土に関する知識や故郷を追われた人々の悲しい思い、返還への強い願いを忘れずにいよう。そして、時には友達と語り合い、自分に「今、何ができるのか」を考え続けようと思う。

一つ、明るい記事もあった。島で暮らすロシア人が、「お墓を清掃していますから、安心してください。」とメッセージを伝えてきたというものだ。このように国同士ではなく、領土問題の当事者である民間人が、お互いを思いやる心こそが、平和的な解決に向けての大きな力になるのかもしれない。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

熱い気持ちを伝え続ける。明日も。

南丹市立殿田中学校
二年　船越　璃子

「こだまする　引揚船の海鳴りに　天地もさけよ　今君帰る」

戦後、舞鶴の港に引き揚げてきた方々を、真心を持って迎え続けられた「引揚の母」田端ハナさんの句だ。引揚者を待つ人の天地もさけるほどの心の動きを、熱い思いを持って表されている句だ。私の住む京都府は北方領土から遠く、北方領土問題と深い関係を感じることはなかったが、そうではなかった。

色丹島出身の得能さんが語られた体験を知った時は、フィクションなのではないかと思うほど過酷で想像を絶する話だと感じた。故郷の島を追い出された時は、荷物などと一緒にモッコに入れられ船上に運ばれたそうだ。船の環境は大変不衛生で、その中で長時間過ごした時は、どんな気持ちだったのだろう。あまりの変化に戸惑う暇もなく、体調を崩した人もいただろう。恐怖や不安といった感情が頭をよぎり続け、心にも深い傷を負っただろう。その事実は、今の私の日常とはほど遠い。だからもっと知らなければならないと思った。

昭和二十年八月八日。ソ連は中立条約を破り、日本に参戦した。多くの日本人が捕虜となり、過酷な状況のなかで抑留生活を送った方々が、命からがら生き延びて、やっとの思いでたどり着いたのが舞鶴だ。戦後北方領土に侵攻してきたのもソ連。北海道と京都は離れたところにあるが、シベリアで抑留生活を送られた方々も、島を追い出され樺太で抑留された方々も、大切なものを奪われ、人生を狂わされてしまったという共通点がある。そして、長い年月が流れ、そのままにしていては忘れさられてしまう問題も共通している。当事者にとって、それはあきらめられているのと同じことであり、一番悲しいことだ。私たちがこの問題を伝えていく理由はここにある。

「伝える」とは、単に問題を伝えればいいというわけではない。当事者の思いや考えを伝えなければ、他の人の関心をひくことも、実感を持ってもらうこともできず、結局他人事になってしまう。だから当時の思いや現在の考えにいたるまでの当事者の心境を伝える必要があるのだ。

元島民の得能さんは色丹島に住むロシア人を「息子」と呼び交流を続けておられる。彼のことを憎んでいてもおかしくないが、得能さんは「ロシア人だから」と最初から決めつけず、色丹島という故郷を持つ者同士、故郷を大切する気持ちを感じ取り、「息子」として接することができているのだろう。静かだけど、人を大切にする真心と熱い心の交流があると感じた。

私達がこの問題を伝える上で大切なこと。それは当事者の心境を伝えるということだ。そして、当事者の心境を伝えるために必要なこと。それは引揚の母田端ハナさんのように、自分自身が当事者の目線に立ち、熱い思いを持って元島民の方々の思いを伝えることだ。そのために私はこれからも学び考え、発信し続ける。強い気持ちを持って。

優秀賞（京都市教育長賞）

北方領土と私たち

京都市立嵯峨中学校
一年　潮海　咲良

私が北方領土を知ったきっかけは、小学校の社会の授業で日本の最北端の「択捉島」という島を覚えたことです。また、中学校の社会の授業では、「北方領土問題」があること、北方領土には、択捉島以外の島があることを知りました。初めは、言葉を覚えただけで、興味がなかったので、深く考えてみませんでした。しかし、夏休みに「北方領土の作文」を書くため、北方領土問題について調べていくうちに、北方四島の元島民の人々の証言を見て、少しずつ興味を持ちました。

私がネットで調べた証言のうち、一番心に残ったことは、証言している人が高齢者であること、私たちと同じくらいの歳に体験していたことです。証言を聞いて「ひどい」と思ったことは、ソ連軍が、北方領土を占領した後に島民の家の中を物色し、金品(特に、腕時計)、馬や牛なども奪ったことです。また、ソ連軍の命令で、北方領土から着の身、着のまま、強制的に引き揚げが行われたことです。

引き揚げ船に乗っていた日本人は、北海道に行けると思っていましたが、樺太(サハリン)の収容所に連れて行かれました。そこでは、栄養失調や病気などで多くの人々が毎日のように亡くなっていたそうです。

ソ連軍が占領する前までは、厳しい自然環境だけれども、豊かな自然に囲まれて子供たちは楽しく過ごしていたそうです。

私は、京都市の中でも自然に囲まれたところに住んでいます。もしも、今、平和で楽しく住んでいる京都市に、突然、外国の軍隊がやってきて、色々なものを奪われて、何も持っていくことができずに住んでいる場所から追い出されたとしたら、私は、恐怖や不安、悔しい、悲しい、憎い気持ちになると思いました。

故郷を奪われた北方領土の島民の方々の気持ちを考えると、北方領土を早く返還してほしいと思いました。しかし、ソビエト連邦から北方領土への入植者は、七十年以上暮らしていて、その人々にとっても故郷になってしまっているので、北方領土の問題の解決はとても難しいと思いました。

私は「北方領土問題」の勉強をして、言葉は知っていたけれど、詳しい内容は知りませんでした。

しかし、私にとっても、日本にとっても、非常に重要な問題だということが理解できました。今、私たちにできることは、北方領土を知ること、忘れないこと、みんなに伝え続けることだと思います。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

十四歳になった私から曽祖父へ

舞鶴市立白糸中学校
二年　土居　きずな

毎年の彼岸と盆暮れには、先祖の墓参りに行っている。

「どうして泣いているの。」

当時七歳の私は父に問うた。曽祖父は太平洋戦争に行き、遺体もないまま戦死報告が届いたらしい。父は曽祖父の話をするたびに涙を流していた。

「どうして、戦わなければいけなかったんだ。せめて遺骨だけでも。」

と。私にはよく分からなかった。でも、これだけは分かった。戦争を起こしても誰も笑顔にはならないということを。

今から七十八年前、北方領土に住んでいた日本人島民は、突然故郷をソ連軍によって奪われた。

「やっと、平和に暮らすことができる。」

そう思っていた矢先の出来事。元島民の方々はどんなに辛い思いをしただろうか。北方領土には国のために戦った方々のお墓もある。今や手入れも十分にすることができず、自由に行き来することも許されない。

現在の北方領土はロシアの風景にすっかり染まってしまった。正にここはロシアが我が国の領土だといわんばかりの街並み。七十八年も経てば、北方領土で生まれ育ち、ここが生まれ故郷だという人もいるのだろう。私たち日本人が考えるべきことは、北方領土の返還だけでなくて、そこで生まれ育ったロシア人たちを元島民と同じ苦しみや悲しみを感じさせないためにはどうすれば良いかということを考えるべきではないだろうか。

二〇二二年二月二四日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。かつてソ連の攻撃に遭った元島民の女性は、この戦争に対して

「当時の記憶がよみがえります。今のロシアのやり方は七十八年前と全く変わっていません。自分がそういう体験をしてきたから、つらいだろうな、苦しいだろうな、どうやって生きているんだろうなと感じます。ウクライナが一日も早く平和になりますように。」

と、ウクライナの平和を祈っている。ソ連の攻撃に遭ったからこそ、身近に考えられるのだろうか。それは違う。元島民のように故郷をロシアに奪われ家族を亡くした人だっている。

これまで、戦争はいくつも行われてきた。私の父のように多くの涙を流した人が数えきれないほどいる。決して他人事として考えてはならない。私たちが自分事として考えることで、それが元島民とウクライナの人々の希望になるかもしれないのだから。

この冬も私は曽祖父の墓参りに行くだろう。そのとき私は曽祖父にどんな言葉をかけようか。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土と全国民

京都市立久世中学校
一年　松尾　昂

僕がその見慣れない外国語らしき文字を初めて目にしたのは、お母さんの実家、青森のおじいちゃんおばあちゃんの家に帰省した時だ。僕の住む京都は、国内外問わず観光客が多く、交通案内版や看板などに日本語と並んで英語、中国語、韓国語が書かれているのをよく見かける。でも、青森ではそれらに加えてナゾの文字の表記を時々見かけた。気になりお母さんに聞くと、ロシア語だという。東北の青森や北海道は地理的にロシアに近いこともあって、水産物の取引などでロシアとの交流があり、コロナ禍前の話だが、基本国内線のみの地方空港である青森空港から、ロシアのウラジオストクへの直行便も出ていると聞いて、ちょっとびっくりした。ただ、その時はロシアに近い青森は安くて美味しいタラコやイクラがお腹いっぱい食べられていいなあと思っただけだった。

小学校高学年になり、学校で北方領土問題について勉強した。地図で見る限り、どう考えても日本列島に連なる日本の島々として存在し、日本人が開拓し、日本人が暮らしていた。北方四島を、第二次世界大戦の終戦間際、旧ソビエト連邦（現在のロシア）が占領を始め、日本人を追い出し、その後七十八年という長い間実効支配を続けているという。僕は「ロシアはなんて国だ。」と無性に腹が立った。その事を家に帰ってお母さんに話すと、「日本も何もせずにいたわけではなく、平和的に返してもらおうと様々な取り組みをしてきた。タラコやイクラの経済交流や直行便を飛ばしての人の交流も、実はそういうことのひとつだった。」と言われて驚いた。調べてみると確かに、元島民の人が北方四島にお墓参りに行っていたり、日本とロシア双方の文化体験などが行われていたり、お互いの国への相互理解を深めるような取組が一時期活発に行われていた。これですぐに北方領土問題が解決する、とは思えないけど、地味でも大切な取組だと思った。しかし、約一年半前、そのロシアによるウクライナへの軍事侵攻が起こった。毎日ニュースで目にするウクライナの様子や、ロシアに対する日本や他の国々の働きかけ、それでも侵攻をやめないロシア。「ダメだ、この国、話が通じない。」と心が重くなった。「本当にいつか北方領土返してもらえるのかな。」と不安になった。

それでも大事なのは、北方領土問題について、日本人一人一人がきちんと理解すること。北方四島を故郷にする人も居るのだから絶対に返して欲しいという強い気持ちを持つこと、最後は「人」、人を信じること、だと僕は思う。今の僕にはこのくらいしか思いつかないけど、これからも勉強を頑張り、社会のことに関心を持ち、少しでもいい世の中を作っていけるような大人になりたいとこの作文を考えながら思った。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

つながりの連鎖

南丹市立殿田中学校
二年　楓　るり

弟は目がぱっちりしていて、とてもかわいらしい。大きくなったら一緒に夏祭りに行きたいし、何でもない日なら雲の形のことだとか話しながら一緒に絵を描いて過ごしたい。私の住む日吉町は、とにかく自然がきれいに映るし、人のぬくもりを感じながら多くの人と手をつないで生きていってほしい。

「食事はコーリャンのお粥と鰊の塩漬け。子供たちは栄養失調に陥り歩くことも出来なくなっていった。乳児を背負ったまま乗船した母親もいた。函館に上陸し子供たちを入院させたが手遅れのため六人も七人も命を落とした。そしてその数は半年後、一年後と更に増えていった。」これは、元島民鈴木咲子さんの証言だ。生まれて間もない弟のいる私にとって、衝撃的なものだった。もし、自分の住んでいる島にソ連兵が来て、訳も分からず働かされ、居場所を奪われて、遂には島を追い出されてしまったら、そして大切な弟を失ってしまったら、表現できないほどの感情が体中を駆け巡ると思う。そして、もしも自分が生き残ってしまっていたら罪悪感も一気に襲ってくるだろう。奪った国の人をずっと憎み続けるに違いない。

そんな時、ビザなし交流で国後島に渡った経験のある先生から現地ロシア人たちの話を聞いた。彼らはとても温かくて、日本文化が好きで、独自に日本語を学んでいる方もいたそうだ。夕食会の最後には「また、会いましょう。」とホストのロシア人が話され、別れには涙が出たそうだ。元島民の得能さんも、色丹島を同じ故郷とするロシアの方を息子として大切にされているという。

私はこの事実を知り、国と国との間には互いに歩みよれないほどの大きな壁があっても、幸せに生きたいという願いはどの国の人でも変わりないと思うようになった。特に家族という存在は幸せな人生のために必要不可欠なものだ。私たちはその大切なものを守るために生きている。だから、ビザなし交流が途絶えた今も、得能さんのご先祖のお墓はロシア人の息子さんが家族の一員としてきれいにしてくださっているのだろう。「家族」という温かなつながりは、国を越えて人と人を結びつけることができるのだ。

今の私には、国と国を動かすような力はない。でも、人と人とのつながりはとても大切にしている。一人で解決できない問題も友達と手を取り合うことで何とかなることもある。北方領土問題も、国と国の関係性は悪くても、その国の人同士が互いに手を取り合って良い関係を築いていけば、小さな一歩かもしれないが、北方領土問題の解決に近づいていけるのではないかと思う。そして、その輪を広げていくことなら私にもできる。私の生まれたばかりの弟や小さな子どもたちが大きくなる頃には、今よりも人と人のつながりが深まり、元島民の思いを受け取る人が増えていてほしい。そして、人同士、温かい手をつないで生きていけるような北方領土にするために、私は元島民の思いを深く理解した上で受け継ぎ、まずは家族や友達から伝えて、共に手をつないでくれる人を増やしていきたい。私一人では少しの力しかないけど、つながりの連鎖でお互いを分かり合える故郷、北方領土を守っていきたい。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

僕が考える北方領土問題

京都市立音羽中学校
二年　樋口　月明

北方領土青少年現地視察事業に参加してから一年が過ぎました。この一年間、自分の周りには、北方領土について深く理解してくれる人が増えましたが、何も変化しないのが現状です。この事業でお会いした、当事者二世の方がおっしゃっていた言葉がとても記憶に残っています。「私達は返してほしいのではない。ただ墓参りや自由に行き来できるようにしてほしいだけ。」この言葉をおっしゃっている時は目に涙を浮かべられていました。それほど、当事者にとって、とても重要なことだと改めて気付かされました。

しかし、日本国民や、ロシア国民全員がこの問題について関心を持っているわけではありません。中には、知らないという方もいるでしょう。ニュースなどで流れる時は、ロシアが絶対に悪だという風に報道されていることが多いように感じます。それでは日本国民の敵対心がどんどん増えていくだけで、問題は解決しません。だから、ニュース番組などでは、当事者の意見にも耳を傾け、真実を報道することが大切だと思います。北方領土という土地に日本国民とロシア国民が共存しあうというのが、僕が考える一番良い未来です。そのためには、両国間の外交だったり、両国民間の話し合いなどが積極的に行われていくことが重要だと思います。北方領土がロシアに占拠されてから七十八年経ちました。当事者の平均年齢は八十六歳にもなりました。語り部の人数も少なくなりました。そして、北方領土で生まれ育ったロシア人がどんどん増えてきました。このような方達に、いきなり北方領土を返せというと、自分の故郷を追われる形になります。それでは当事者がされたことと同じことをしてしまうことになります。だから、僕は両国民が共存する地に北方領土がなってほしいと思います。北方領土問題は、とても繊細な問題であり、個人が解決するのは難しいですが、署名活動や、関連情報を身の回りの人にシェアすることは自分にもできると考えます。政治家に直接意見を伝える手紙やメールを送るなどの方法もありますが、ハードルが高いので、問題の理解を深めるために学び、意識を高めることも、問題解決の第一歩です。そして、周りの人に北方領土問題を解決するために関心を持ってもらうには、日常生活で話題に取り入れてみたり、ニュースでやっていたら話してみたり、身近な人々とどうすれば解決できるか話し合ったり、北方領土に関する動画やSNSを送ってみたりと、色々な方法があります。

僕は、この北方領土問題は、平和的な解決が一番のポイントになると思います。この問題は複雑です。解決のためには、対話と協力が必要です。僕はこの問題の理解を深め、平和的な解決に向けた取り組みをサポートしていこうと考えています。

優秀賞（京都新聞賞）

会いに行こう

京都府立須知高等学校
一年　谷垣　帆乃香

会いたい人に会いに行こう。そろそろ花が枯れてきたから、新しい花に取り替えよう。最近起こった出来事を聞いてほしいな。私たちは、なくなった人へ、命日や春と秋のお彼岸、お盆の時期など、いつでもお墓参りへ行くことができる。人によっては毎日欠かさず行く人もいる。私たちはそこで何を思い馳せるだろう。何を感じながらお墓を掃除するだろう。日頃、見守ってくれてありがとう、といった感謝や、故人の生前の思い出を振り返るなど、返事が返ってくることはないが、心があたたかくなるひとときだろう。そんな私たちの生活や血族として密接な関係のある人と会えなくなったらどうだろうか。

北方領土問題が解決することも進展することもなく、七十年以上が経過した。社会は焼け野原から目まぐるしく姿を変え、美しく平和な町や国になった。その時の流れに私たちは生まれ、便利な世の中で今日も生活をしている。その傍らで、今も北方領土の返還を求めている人たちがいる。故郷を奪われた人たちの平均年齢はもう、八十七・五歳と高齢である。抵抗する時間もなく、やむをえず自分の故郷を追い出され、いつか帰ってこれるはずと信じて八十年近く過ごしてきた人たちは、いつになったら好きなときにお墓参りに行けるのだろうか。

「絶対帰ってくるから」と心に誓っていても、無念なことにお墓参りに行けず、戻りたい故郷ではない本土で生涯を終えた人たちがたくさんいる。遠くはない距離で、でも会いに行けない問題で、どれだけつらい思いをしただろう。北方四島の土に眠る自分の先祖や親に会えないという悔しさを、どれだけ味わわされただろう。一体いつになったら会いに行けるのか。いつか、ロシアの人々と共に住むという未来は来るのだろうか。

「会いたい人に会いたい」その切実な思いを現実にするために、私たちにできることは確かにある。訴え続けることをやめないことだ。返還するという思いを私たち若い世代が使命として受け継ぎ、一丸となって声をあげ続けると、未来はきっと明るくなるはずだ。遠い場所、関係のない人たちではない。私たちはつながっている。できることはたくさんあり、小さな声が大きな声になる。

会いたい人に会いに行こう。お墓参りにいつでも行けますように。皆が、大切な人たちのそばでずっといられますように。私たちならできる。明るい未来は開ける。

優秀賞（京都新聞賞）

繋がろうとする思い

京都市立嵯峨中学校
一年　山室 仁花

私が北方領土について深く考えたのは、中学校の社会が初めてかもしれない。社会の授業で私は先生に、ロシアが不当に日本の土地を占拠しているということを教えてもらった。

そこで今回、私は北方領土について考えることにした。まず、インターネットで、「北方領土問題」というワードで調べてみた。すると「北方領土が外国の領土となったことはない」や「ソ連は一九四八年までに約一万七千人の北方領土に住んでいた日本人を強制退去させた。」と書いてあったのである。ロシアはそんなにも北方領土がほしいのだろうか。ロシアの領土はすでに大きく、日本の約四十五倍もあるという。なぜ、ロシアが北方領土を求めているのか調べてみた。

あるデジタル新聞では、「北方領土は小さくても第二次世界大戦で勝って得た大切な土地」だと書いてあった。ロシアの方は戦争で二万人以上の方が亡くなったようで、北方領土は二万人の命と引き換えに得たものということだ。また北方領土に住んでいるロシア人の家族には三世代にもなっているところがあるそうだ。もはや北方領土は住んでいる者にとっての故郷となってきているみたいだ。そうなると私としては、もう手遅れになっていると思う。日本では八十五歳の人たちが生まれた土地に帰れなく焦っているそうだ。しかし北方領土に住んでいる人たちは「日本に引き渡したくない」という声が高まっているそうだ。北方領土はロシア人にとっても、日本人にとっても大切な故郷となっている。

この絡み合った心の糸を、どう整理していくかは、ロシア政府、日本政府がやらなくてはいけないことだと思う。今もウクライナの戦争などでロシアが次々と領土を奪おうとしているが、そのことについて私はこう思う。ロシアにとってウクライナは本当に得るべきものなのか、戦争をしてまで手に入れなければいけないものなのかということだ。ウクライナの人にとってウクライナという国は、とても大切なものなのだから、奪わないでほしい。

しかし私たちが一番身近にあるものは北方領土のことだ。まず私の気持ちは北方領土に暮らしている人も、追い出された人も、そして私たち北方領土にあまり関わったこともない人も、交流して互いに認め合い、この問題が無くなるということを願っている。

今、私たち日本人や海外の人にとっても、互いに認め合い、助け合うということが必要とされているなら、私たちに出来ることは海外の文化を知り、否定してはいけないという当たり前のことからすればいいと思う。

一刻も早く北方領土問題が終わるということを、私は心より願っている。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土がつなぐ

舞鶴市立白糸中学校
二年　村田　美月

皆さんは故郷を愛していますか。私にとって故郷は家のようなかけがえのない存在です。この北方領土問題でふるさとに住み、自由な生活を送れることがどれほど幸せなことなのかに気づかされました。私の町とかけ離れた存在だと思っていた北方領土。でも、今は身近にある全ての日本人に関わりの深いものだと知りました。

まず、北方領土は第二次世界大戦後にソ連軍の侵攻によって占拠され、今もロシアの人々が暮らしています。かつて住んでいた日本人は強制送還され、今、日本人が戻れたり住むことは難しい状況にあります。今も日本側は返還を求めていますが、ロシア側は自分達の領土だとして返還には至っていません。

私がこの問題で焦点に置きたいのは元島民、現島民にとってのこの故郷のあり方、北方領土は今実際に住んでいるロシア人の方にとっても故郷であり、元島民の方にとっても故郷です。私が故郷を愛することと同じようにどちらも故郷を愛しているのだと思うと、この問題の難しさがよく分かります。また、ここで生まれた文化や思い出もあるでしょう。北方領土で生まれた伝統や文化は、その土地に住む人とつながってその町だからこそ花開くものだと私は思います。この問題は領土問題が鍵なのではなく、罪なき元島民の方々が悲しい思いをしたということ、魅力ある故郷と人々とを強制的に分裂させたことだと思います。このことから思い出深い故郷、故郷の文化とともに暮らせることがどれだけ喜ばしいことなのか考えさせられました。当たり前の喜びに気づけなかったことがとても恥ずかしく感じました。

私の住む舞鶴市には、引揚記念館や赤煉瓦の歴史、お祭りなど誇りに思えるものがたくさんあります。また舞鶴市民はそれを愛し、根強く伝統を引き継いでいます。同じように北方領土で生まれた伝統や文化をどう残していくのか、解決の際にはそんな北方領土と島民のあり方をよく考えなければなりません。その国同士の問題ではあっても、元島民の人の思いや悲しみは日本国民で分かち合いたい。北方領土は全てのロシア人、日本人を繋ぐ決して無関係ではない問題だと私は悟りました。

また私がこの問題の解決にあたって大切にしたいのは、元島民の方、今実際に住んでいるロシア人の方の思い。今後故郷はどうすればいいのか、国は違うけれど愛している故郷は同じという複雑な関係だからこそ、慎重な協議が必要です。そして私たちをはじめ多くの若者が声をあげることで、元島民の方々の心の救いになるかもしれません。実際の解決策としては難しいかもしれないけれど、少しの一歩が解決の糸口につながるかもしれません。まずは、私たちが無関心であったこと、勝手に目を背けていたことを変えたい。何事も自分事と捉えることが大切なのだと学びました。

今の時代、私たち若者はスマホから伝わる目の前の情報でいっぱいです。可能性が広がってたくさんの知識を蓄えられるようになったのだからこそ、私は伝えたいのです。「目の前のことでいっぱいになり、現実から目を背けないで」と。

北方領土問題もそうです。自分のことでいっぱい、自分とは関係ないから無関心でいた過去の私と、たくさんの若者に伝えたいです。

目の前のことだけじゃなく、多方面に目を向けられる、周りを巻き込んで行動を起こせる自分を、私は追い続けます。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土と私の理想

京都市立洛南中学校
二年　後藤　崇志

北方領土といえば、「本来は日本の土地である」や「ロシアが不法に占拠している」などと聞く。しかしロシアだけが悪いのではなく、実は現在の日本にも問題があると思う。私は社会の授業で北方領土を勉強し、その問題に気づいた。それは、私たちが北方領土の問題を他人事のように考え、目をそらしていることである。日本人の大半は、「今、北方領土はロシアに不法に占拠されているけど、いつかは返ってくるだろう」と思っているに違いない。実際、家族に聞くと「習ったけど詳しくは覚えていない」「そこまで興味がない」などと日本の問題として捉えていない。私も授業で習った直後はそう考えていた。しかし、当事者だけでなく、直接関係ないと思っている若い世代の私たちも含む多くの日本人が、声をあげて問題視していかなければ、この問題がこれ以上先に進むのは難しいだろう。

そこで、私は「共存」という道を考えた。例えば、北方領土は日本に返還してもらい、土地や漁業権は日本のものだが、観光業や製造業はロシアも入ってきても良い事にしたり、そこで生み出された物を五対五で分けたりすればロシアにも日本にも収入が入る。さらに北方領土を通じて日本とロシアの間にも様々な交流が生まれ、新たな文化の発展や、技術の進歩が訪れるかもしれない。

私は北方領土に住むロシア人はきっと悪い人ではないと思う。実際に北方領土に行った人の意見で、「とても優しい人が多い」や「楽しかった」などという声もある。しかし、北方領土が占拠される前に住んでいた人々は、今生きていたとしてももう最低でも七十八歳を超えている。最後の時を過ごすところを考える時、自分の故郷である北方領土に帰りたいという人もいるだろう。だからこそ早めに返還して欲しい。しかし、北方領土に住むロシア人達にとっては、それをいきなり自国が返還したからという理由でその土地から離れなければならないのは納得できないだろう。彼らは罪を犯しているわけではない。そう考えると領土返還はして欲しいが、追い出すのには不満がある。そこで、自分の生きてきた土地から離れたくないという人だけ、永住権を取得できるようにすれば、元々住んでいた人も、現在住んでいる人も生まれた土地に住むことができる。私は理想論と呼ばれるかもしれないが、これが最善だと考える。

佳作

北方領土と私たち

京都府立福知山高等学校附属中学校
一年　吉田　陽希

「寛太、お前は何になりたい。」「何でもできるし、何だってなれるんだ。」これは、純平の言葉だ。現在の日本では、この言葉のように、信教や表現、思想および良心などの自由が認められている。これはとてもすばらしく、世界に誇れるものだと思う。

では逆に、以前は自由が認められていなかった、やりたいことができなかったのだろうか。結論から言うと、「できなかった。」戦争への動員や工場での労働、また教育を受けられなかった子や女性差別など、自由がある人は少なかった。

現在でも、北方領土立ち入りの自由が認められていない。「サンフランシスコ平和条約」では、択捉島までが日本の領土だとされているが、「日ソ共同宣言」には、歯舞群島及び色丹島を日本に引き渡すとある。残りの二島はどうするつもりなのだろう。もしこれを認め、実行した場合、国後島と択捉島を放棄することになってしまう。そこには貴重な資源も、日本の未来も眠っている。それを手放してはいけない。そもそも、なぜこのような状況が続いているのだろう。このままでは武力衝突が起こるかもしれない。第二次世界大戦の残り火が火種となり、燃え広がるように。だから、条約上は終わっても全ての問題を解決するまでは第二次世界大戦は終わらないと考える。

ソ連と言えば、日本人をシベリアの強制収容所で労働させていたことを思い出してしまう。映画の中でも父を含む純平たちも収容されていた。満州に住んでいた人たちが「トウキョウダモイ（東京に帰してやる）」という嘘につられ、送られたそうだ。そもそもシベリアは、冬は気温がマイナス五十度を下回るため、寒さに弱い人間が本来侵入不可能な領域である。また、少量の食量しか与えられないため、約五万五千人もの人が亡くなった。また、食料を得るため、馬糞の中の消化しきれなかった豆を探す人さえいた。

京都府舞鶴市には、これらのことを知れる「引揚記念館」という施設がある。そこには、抑留のことを記した「白樺日記」や実際に着ていた服が展示されている。ぜひそこに行ってほしい。

戦争が終わっても、その爪痕のせいで苦しむ人もいる。また、解決されていない問題もある。それらを他人ごと、自分には関係のないことだと思いこまず、それに関する情報に触れておきたい。また、今はロシアによるウクライナ侵攻など、世界中での戦争・紛争が問題となっている。純平たちのように苦しむ人が絶えない。このまま解決に向かおうとしなければ第三次世界大戦が起こるかもしれない。それでは、どのような兵器が使われるかわからないし、文明が消え去ることだってあると思う。日本も例外ではない。軍事力を強化すれば攻められにくいが、世界平和は進まない。憲法第九条を生かした平和外交を進めるため、どうすればよいか考えたい。

佳作

命の重さ

南丹市立園部中学校
二年　安達　唯愛

「米が欲しいか命が欲しいか」

命はどんなものにも変えられない。この言葉を聞いて、私は強く思った。この言葉は、北方領土に住んでいた夫婦の会話である。一九四五年、北方領土にソ連が侵攻した時に、一七、二九一人の島民が故郷を追われることになり、そのうちの約半数が自力で島を脱出した。この時、島に住んでいた夫婦は、米やタンスなどを積み、夜の九時頃に船を出した。海で船を漕いでいると、大しけにあい、船に大量の水が入ってきた。「このままでは水の重みで船が沈んでしまう」そう思った父親が、船に積んである荷物を海に捨てようとした。しかし、母親は荷物を捨てるのを嫌がった。そして、父親は「タンスが欲しいか命が欲しいか」「米が欲しいか命が欲しいか」と言った。

私は、この言葉を聞いて、命はどんなものにも変えられないのだと思った。自分が生きるためには食料が必要だし、大切なものは残しておきたい。けれども、それを捨てないと死んでしまう状況であった。そんな決断の時には、私であれば積み荷を捨てられずにそのまま死んでしまうかもしれない。それを夫婦は積み荷を捨てる決断をし、生き延びようとした。島の人たちは、命の重さを人一倍知っており、だからこそ、このような決断ができたんだと思った。

しかし、このようなことも普段の私なら他人事に思ってしまうことがある。今の自分たちの生活の中にも、他人事だと思ってしまうときが多すぎるように思う。例えば、学校にお菓子のゴミが落ちていた時、「自分は落としていないから大丈夫」「関係ない」と思ってしまう時がある。そうやって、大きな問題から目を背けてしまったらいつまでたっても解決しないままである。だから、自分は関わっていないから、関わりたくないからどうでもいいなどの他人事な考えがとても良くないと思った。

だから、他人事ではなく、自分事として考えることにした。そこで、北方領土問題対策協会のホームページを見て、調べることにした。北方領土問題を解決するためには、まずいろいろな人に知ってもらうことが大切だと思った。それは、「米が欲しいか命が欲しいか」の言葉が思い出されたからだ。この言葉には、命の重さをとても強く感じられるからだ。

だから、私たちは、命の重さを感じて、今の人たちに知ってもらおうとすることがとても大切だと思った。

そのためにできることは、身近な人に北方領土のことを教えてあげることだ。友達でも、家族でも、近所の方にでもよい。まずは自分から行動を起こすことが必要である。そうすれば、北方領土のことに興味を持ってもらえるかもしれない。その少しの勇気を持って、北方領土問題を解決する一歩としていきたい。

佳作

北方領土とロシアと日本

南丹市立八木中学校
二年　田中　楓珈

この作文では、北方領土について調べたことと私の感想を書きました。北方領土問題とは、第二次世界大戦終戦後にソ連軍が日本の領土である北方領土に侵攻し、現在に至るまで法的な根拠なく占拠し続けていることです。住んでいた日本人は島から脱出するか樺太経由での引き上げなど強制退去させられ、現在、島には日本人が一人もおらず、自由に行き来することができない状態が続いています。追い出された島民の方は現在、平均年齢が八十七歳を超えていて、少しでも早い北方領土の返還が求められています。

他人事のようにも思えますが、実際に今住んでいる町から追い出されると考えるととても悲しいです。そこで私たちにできることがないかと調べてみました。外交に関係することなので、できることも限られていますが、島民以外の国民も北方領土について知り、国民の心を一つにして返還を願うことが返還実現の後押しとなる、と政府は発信しています。『帰りたい』と願う人たちのために、日本の領土を守るためにも、北方領土の少しでも早い返還を実現してほしいと思いました。

次に視点を変えて、北方領土で暮らしているロシア国民について調べてみました。ロシア国民はロシア政府と同様に返還には反対だ、クリル列島（北方領土）はロシアの領土だ、という意見がほとんどのようです。そんな中、あるニュースを見つけました。それは国後島から北海道に泳ぎ着き、日本に亡命したロシア国民がいるというものでした。彼も最初は返還に反対していましたが、北方領土の歴史を研究するうちにロシアが島を不法に奪ったと思うようになったそうです。このことをメディアで述べるとロシア政府から圧力をかけられるので、今は日本で表には出ないようにして暮らしているそうです。

そんなロシア政府の対応を知って、ロシア国民には北方領土問題で何か後ろめたいことがあるのだろうと思っていました。私はロシアの人たちに「日本が正しい」というのではなく「北方領土の歴史について調べてみてほしい。」と伝えたいなとニュースを見て思いました。日本が返還を実現した際に、島に住んでいるロシア国民はどうなるのか、と気がかりでしたが、日本政府がロシア国民の人権、利益及び希望を十分に尊重することとしているそうなので安心しました。ロシアが不法に占拠していたとしても、島が故郷であるということはロシア国民も一緒だと思います。返還が実現しても現島民の人権が、元島民のような悲しい思いをすることがないようにしてほしいです。

私はただ返還が実現すればいいとは思いません。今の島民の暮らしを守り、元島民の人たちが故郷へ帰れる。そして協力して助け合いながら島を発展させてほしいと思います。私は北方領土問題が解決され、元島民が「ふるさと」に帰れる日が来ることを心から願っています。

佳作

領土問題に宿る心

京丹波町立蒲生野中学校
二年　中川　向日葵

世界では今、日本の北方領土問題と同じような問題がある。それは、パレスチナ問題だ。北方領土の学習や人権学習を通して、北方領土の元島民の気持ちや考えを知り、元島民と似た立場のパレスチナ難民の気持ちも知り、私たち日本人にも重みのあることだと考えた。「知らない」などで済ませず、もしも同じ状況下になったら、ということで考えたい。

学校で先生から聞いて初めて知ったパレスチナ問題。「遠い地での紛争か。」と他人事に思っていた。でも、その状況を聞いているとパレスチナの人々が国を追い出されたことを知り、日本の人々が北方領土を追い出されたことと同じ状況だと思った。だから北方領土問題を抱える日本人として知っておかないと、と思った。私は、「土地を追い出される。」というのは心を失うことだと思う。生まれてから、心と体を育ててくれた心のこもった土地を、他人によって奪われるということは、土地に宿った人々の心を置いていかなければならないということだ。追い出された人々は「土地への思い入れ」という心の一部を失うことになる。

土地を追い出された人々はどんな思いで心を失ったのだろうか。また、パレスチナ問題において土地を追い出す側の思いはどうだろう。実際に自分がそれぞれの立場になってみる。もし自分が土地を追い出される立場になったら、悔しいので反抗してしまうだろう。だから、そうなると戦争になると思う。私は五年生の時に小学校を転校した。友達と当たり前のように笑っていた生活がガラッと変わると思い、最初は辛かった。もちろん親に反対はしたが叶わなかった。簡単に理解できる問題ではないかもしれないが、故郷を離れ、慣れ親しんだ町並みや、仲の良かった友達と別れる時に感じたあの寂しさは、この問題の被害者の気持ちとぴったり重なった気がした。

この問題の加害者は、過去にパレスチナを追い出されていた。だから、次はパレスチナを自分たちのものにしたいのは分かる。しかし、攻撃をして奪うということは無関係の多くの人に大きな悲劇を与え、決して許されることではない。

パレスチナ問題はある特定の地域の争いであるが、人々の気持ちや奪われゆくものは決して小さくはない。北方領土も同じだ。七十年余も人々の忘れられない思いを背負う領土問題。それに、心の一部は簡単に失ってしまうし、北方領土のように、心は「土地」に、その問題があったという「歴史」に長く宿り続けていく。今回の学習を通し、世界の新たな状況に気づけたとともに北方領土問題ということの重大さを改めて理解することができた。この問題に対して、心を不本意に失ってしまった人たちのことを理解することで、私たちも同じ状況になった時に世界の誰かに理解してもらっていると思え、前向きな気持ちになるだろう。

決して「知らない」で済ますことなく、日本や世界の情勢について、常に目を向けていきたい。

佳作

北方領土問題を解決するためには

京丹波町立瑞穂中学校
一年　川淵　莉未

みなさんは自分が生まれ育ったふるさとがなくなってしまうことを想像したことはありますか？「そんなことは起こらない」と思っている人もたくさんいると思います。私もそう思っていました。しかし、この北方領土問題について学習して、私は初めて北方四島に住んでいる人たちはふるさとに自由に入れないという事実を知り大変驚きました。今住んでいるこの町にもう自由に入ることができない。そんなことは考えられませんが、北方四島の人たちはもう島に自由に入れないのです。私はこのままではいけないと思います。元島民の人たちが、ふるさとに帰れないまま亡くなってしまうのはとても悲しいです。だから、元島民の人たちがまた自由にふるさとで暮らせるように、北方領土問題の解決策を私なりに考えてみました。

まず、北方領土問題とは、第二次世界大戦終戦時にソ連軍が我が国の領土である北方四島に侵攻し、今もロシアが占拠し続けていることです。一八五五年から一九五一年にかけて、日露通好条約、樺太千島交換条約、ポーツマス条約、サンフランシスコ条約の四つの条約を結んでいますが、北方四島は一度も他国の領土になったことがない、わが国固有の領土なのです。

私はこの学習で、元島民の話を読んだり、北方領土問題をテーマとした「ジョバンニの島」というアニメを見たりしました。これを見て、普通にふるさとに暮らして、友達と学校で遊んでいるだけなのに、なぜ島から追い出されて、更には真岡の収容所にまで入れられて、死と背中合わせの日々を過ごして、辛い思いをしないといけないんだろうと思いました。ジョバンニの島で出てきた寛太は、最後に亡くなってしまいましたが、実際は寛太のように小さい子どもが他にもたくさん亡くなったと思うと、胸が痛くなりました。

そんな中、北方領土問題を自分事として何が問題かを考えたところ、元島民の方たちが島に帰れないのが一番大きな問題だと思います。自分が生まれ育った島で、祖先のお墓参りも自由にできない。この状態を放っておくことはできません。元島民の方たちもどんどん亡くなっていき、生存されている方は平均年齢八〇歳越えです。元島民の方たちが少しでも多く生きているうちに北方領土問題を解決したいです。

今、ロシアに北方領土を返してほしいと伝えても、ロシアにも北方四島をふるさととしている人がいます。日本もロシアも両方が納得できる解決策を考えないといけないのです。

これらの問題を踏まえた上で、私がまとめた解決策は、日本にも北方四島を故郷にしている人がいるとロシアに強く主張し、日本の気持ちを考えてもらうとよいと思いました。そして、そこでロシアは日本に領土を渡してしまうと基地を作ってしまうのではないかと思っているので、基地を作らないと約束し、領土を半分ずつにするという条約を結んだら、どちらも納得するのではないかと思います。

今回の北方領土問題について学習したことで、普段は触れないことについて色々学ぶことができました。この問題を解決するために、私たちはどう関わっていけばいいでしょう。それは、今ある問題を一人でも多くの人に伝え、広めていくことだと思います。人と話すのが苦手な人でも、インターネットなどを活用して広めていけば、みんなが自分事として考えられるようになり、この考えが政治家の方たちに届き、ロシアとの交渉に力を入れてくれるかもしれません。だから私は、多くの人に北方領土問題について広めていきたいと思います。

佳作

互いを理解しあう大切さ

京都市立嵯峨中学校
一年　齋藤　穂

北方領土問題について、私は日本とロシア、それぞれの主張に不都合な真実があることを中学に入って初めて知りました。日本側の主張は、ソ連が日ソ中立条約に違反して北方領土を占領し、日本がサンフランシスコ条約で放棄した千島列島に北方領土は含まない、というものです。しかし、当初、日本の委員会によって三回も択捉島と国後島が千島列島に含まれることが確認されていましたが、その後、日本政府は都合の良いように、どちらも千島列島に含まないと主張を変えました。これは、日本にとっては不都合な真実といえます。一方で、ロシアの主張は、アメリカ、イギリス、ソ連の三国が取り決めた秘密協定、通称「ヤルタ協定」で、日本の敗戦によって千島列島はソ連に引き渡されるという内容であり、北方領土は千島列島に含まれ、ロシアの領土になったという主張です。また、日本がサンフランシスコ条約で放棄した千島列島には当然、北方領土も含まれるとも言っています。しかし、ソ連はサンフランシスコ条約に調印していないため、この条約内の権利について主張することは出来ません。これは、ロシアにとって不都合な真実といえます。

私は、日本もロシアも不都合な点があるにも関わらず、どちらも一方的に意見を押し付けているように感じました。両国が自国の意見を言い合っていると、相手の不都合な点を指摘し合うことに留まってしまい、現状の平行線の状態が続いてしまっているのだと思います。

そのような国と国との問題で、故郷である北方領土を強制退去させられた島民のことを思うと、とてもつらい気持ちになります。けれど調べてみると、「ビザなし交流」という元島民が故郷である島を訪れ、現住民のロシア人と交流を深める取り組みがあることを知りました。ビザなし交流は、文化交流会や意見交換会を通して、お互いの理解を深め、在住ロシア人に日本の北方領土問題の考えを伝え、日本や日本人に対する誤解や偏見を解消するためにも重要な取組であり、元島民が故郷へ戻れる貴重な機会でもあります。しかし、昨年ロシアが協定を一方的に破棄し、既にビザなし交流が終了してしまったことを知り、元島民の人達は、ただでさえ強制退去させられているのに、故郷の地を踏むことが許されなくなり、とても悲しいと思います。

私は日本人なので北方領土の返還を願っていますが、日本には、かつてソ連が島民を退去させたような強引なやり方で解決してほしいとは思いません。それは現在、島に住んでいるロシア人に同じような辛い思いをしてほしくないからです。今後も、お互いの立場を主張し続けることは大切ですが、同時に相手の立場や主張も考慮しながら、解決策を考えていかなければならないと思いました。

佳作

北方領土から見る、国のあり方

京都市立嵯峨中学校
一年　寒川　沙歩

私は、小学校五年生の時に、授業を通じて初めて北方領土の問題について知りました。日本の領土だったにも関わらず、そこに住んでいた人を追い出して、現在ではロシア人が住み、軍も駐留しているということに驚きました。その後、「ビザなし交流」や「ビザなし渡航」も停止となり、北方領土で生まれ育った人たちは故郷を訪れることすら叶いません。もし、自分がずっと住んでいた京都で突然、侵略が起きその場を離れないといけなくなって、その後もずっと戻れないとしたら、とても悲しいし、新しい土地でどういう気持ちで生きていけばいいか、わからなくなるかもしれません。そして、生きている限りずっと「いつかは戻りたいな」と思っているでしょう。

私が、北方領土問題について知ったその後に、ロシアによるウクライナ侵略が始まりました。ある日、突然始まったロシアの侵略で、自国を離れざるをえなくなったウクライナの人々を見て、まるで北方領土から追い出された人たちのようだと思いました。どうしてロシアは突然領土を侵略し、先住民を脅かすようなことを繰り返すのでしょうか。私は想像しても分かりませんでした。それでも、戦争や歴史は両側の目線に立って考えることが大事だということを、お母さんに教えてもらったので、ロシア側にとっての理由はなんなのか調べたところ、ロシアは広大な国土を持っていますが、北極海に面している北側は冬の間、海が凍結して船の航行が出来ません。なので、ロシアは歴史的に「不凍港」を重視してきました。西はバルト海、ウクライナと接する南側は黒海、東は北方四島。北方四島は、ロシアにとって太平洋に出るための重要拠点であり、戦略上でも極めて重要な位置にあるということでした。ロシア側からしたら、日本に引き渡したら日米安全保障条約に基づいて米軍が展開するのではないかと警戒もしているようです。この領土を自国のものにすることによって「他国に攻め入られない」「貿易がしやすく覇権が取りやすい」というのは全世界の様々な国で起こっていることですが、そういうことだけでなく実際にその場所に住んでいる人の思いを尊重することは出来ないのでしょうか？北方領土から追い出された日本人は、とても悲しい思いをしましたが、その後に住んだロシア人もいます。もしまた奪い返したとしたら、今住んでいるロシア人にも同じような思いをさせることでしょう。国の利益、不利益だけで考えるのではなく、広い視野で全ての国の人々が明るい笑顔で過ごせるように考えていくことが、一番大切なことではないかなと思います。

佳作

お互いを尊重し合う関係に

京都市立勧修中学校
二年　谷口　桃菜

私が北方領土問題について考えたことは、今この世界は欲望という不足を満たそうとして強く求める気持ちに負けているということです。自分が「一番になりたい」、「絶対に奪ってやるんだ」「譲らない」などというように、相手を思いやる優しい気持ちがありません。国を理想に近づけたいのはどこの国も同じ気持ちです。しかし、そのことによってすごく苦しく、辛い心の傷をもう元に戻すことのできない人がたくさんいます。そのたった一つの島でも誰かの大切な大切な故郷なのです。

北方領土問題が起こる原因を考えていきます。この問題を解決するためには、一人でも多くの国民にこの問題がどれだけ悲惨か、どれだけ身近に起こっていることなのか、理解と関心を持っていただくことが大切だと私は思います。自分一人だけで解決しようとせず、もっと周りに頼ってこの問題がどれだけ間違っていることなのか、共感者を求めることが大切です。

今、島の元住人はお年寄りの方が多いでしょう。お年寄りの方の力だけでは解決に近づきません。だからこそ、若者が多く使っているSNSを通じて、今起こっている悲惨な状況を発信することで、多くの人、世界へと繋がっていくでしょう。私はそう信じています。

他には、人がたくさんいる場所を狙って、外国人観光客や遠足、修学旅行で来た生徒に島の元住人の思いや気持ちをぎっしり詰めこんだチラシを配ったり、ポスターを人通りの多いところに貼ったりすることで、身近に起こることだということをたくさんの人に知ってもらうのです。

もしくは、最近少しずつ行われている、島の元住人の話を聞いたり、実際起こったことをリアルに再現した芝居を小さい子から大人まで分かりやすく理解することができるような啓発活動を広げるべきだと思います。当時は子どももいたわけですから、大人でも恐ろしかったのに、子どもにとってどれだけ怖かったのかが体験できる活動なので、こちらの活動もSNSで発信できると良いと考えます。

私がもし、島の住人だったら怖くて言葉が出ないでしょう。ロシア人を恨むというより同じような思いをする人が少しでもいなくなるよう注意喚起し、呼びかけることを私は考えます。この北方領土問題を現代の大人から子どもまでどれだけ大切な島なのかということを少しずつ伝えていけることを願っています。

佳作

僕は知らなかった、日本人ゼロの日本

京都市立下京中学校
一年　中田　悠晴

みなさんは「北方領土」を知っていますか。北方領土とは、北海道の北東部に位置する択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島の四つの島々のことです。

一六〇四年に江戸幕府が松前藩に公益権を認め、北方領土・千島列島に住むアイヌの人達と交流が始まりました。一八五五年には「日露通好条約」「日露和親条約」が結ばれ、日本とロシアの国境が正式に定まります。その後も数多くの条約が結ばれ、お互いの領土が決まって行きました。そして一九四五年の終戦後、ソ連の不法占拠が始まります。そんな北方領土では、生活が非常に安定しており、極めて自給自足に近い生活をしていました。住民のほとんどは漁業を行っており、独立して家族を呼び寄せて住み着くようになった人もいたそうです。暴風や流氷等で生活に必要な食べ物などが届かないことがあるため、次の年の春までの分の食料品を、秋のうちに買い入れておく家庭も見られました。一方で病院や医者が極めて少なく、設備も整っていなかったため、急病人や怪我の手当てなどはとても困っていて、手当が間に合わないこともありました。

では、なぜこのような領土問題が起きているのでしょうか。日本とロシアは、古くから数多くの条約により、領土や国境が変化していました。ところが、終戦後の一九四五年にソ連は不法に占拠した状態で、翌年に千島列島や南樺太などに対してのソ連編入と領有を宣言しました。そのうち、第二次世界大戦に負けた日本は、「サンフランシスコ講和条約」によって南樺太と千島列島については領有権を放棄することになります。そんな中、今もロシア（旧ソ連）が占領を続けていることから領土問題が発生しています。現在でも国や国民が一丸となって、北方領土の返還を求めています。

いま私たちにできることは、この北方領土問題に関心を持ち、自分たちが暮らしている国でも領土問題が起こっているという現実や発生要因等を知っておくことだと考えます。私たちが大きく動くことはできないけれど、同じ国の国民として理解を深め、深く考えることが大切だと感じました。

今回、この作文を通して新しく知ったことは、いま北方領土には日本人が一人もいないということです。一九四九年までにソ連によって日本人の島民全員、強制退去させられていたのです。日本の領土なのに、日本人が一人もいない事実に、とても驚きました。

作文を書く前は、単純に「勝手に奪われただけであまり私たちとは関係がない」と思い込んでいました。しかし書き進めるうちに、日本が抱える大きな領土問題だと気づきました。遠い地域で起きている出来事を自分の事として考えるのは少し難しいけれど、第一歩を踏み出すことはできたと思います。

佳作

僕の思う北方領土

京都市立久世中学校
一年　上田　真嗣

「北方領土？何それ。」これが、小学生の時に学習したときに最初に思った気持ちです。初めて学習したときには、「なんで日本固有の領土なのにロシアが占領しているの？」と思いました。そこで、僕はインターネットで調べてみました。北方領土は、第二次世界大戦中にソビエト連邦が日本との条約を破り、ソビエト軍に侵攻され、大戦後も不法に占領されてしまいました。これを見て、絶対におかしいと思いました。

中学一年生の社会の学習でも、北方領土は、一方的に侵攻してきたソビエト軍に占領され、日本人は立ち退かされたと教科書に書かれており、今も、北方領土に日本人がいないと聞いたとき、日本人が住んでいないなんてひどすぎるでしょと思いました。「日本」という国の一部なのに、日本人が住んでいないことがおかしいと感じました。ロシアは不法に占領しているので、国際裁判にかけたら、取り返せると思います。しかし、「なぜ裁判されないのだろう？」と疑問に思ったので、調べてみたら、「サンフランシスコ平和条約に署名していないから」と書かれていました。

北方領土は、ロシアにとって太平洋の出口です。ロシアにとって不凍港はウクライナに接する南の黒海、西のバルト海、東の北方領土です。だから、北方領土はロシアにとって、太平洋に出るための重要拠点とインターネットで書かれていました。これを見たとき、絶対おかしいし、重要拠点だからといって、日本の領土を占領してよい理由にはならないと思います。

更に僕は、北方領土近海や北方領土の資源が豊富なことに着目しました。水産資源は、鮪・秋刀魚等の暖流系回遊魚や鮭・にしん等の寒流系回遊魚、鱈・かれい等の寒流系低棲魚等が多数生息しています。森林資源は、色丹島に二〇％の闊葉樹林、国後島には五〇％の原始林、一〇％の原野、四〇％の疎林があり、択捉島には五〇％の原始林、五％の原野、二〇％の疎林、二五％の無立木地や松林帯と、とても自然が豊かです。加えて海底資源も発見され、資源の豊富さからも占領し続けている理由はウクライナ侵略と同じと感じました。強制的に追い出され、悲しみを抱えている多くの人々の高齢化が進んでいるので、一刻も早く故郷に帰れたらと願うばかりです。

最近の若い人々は、領土問題などの類は見向きもしなくなってきています。けれど、若い人々が、領土問題などの課題に目を向け、自分たちで考えを出し、他の人々に伝えていくこと、立ち上がることで、故郷を取り戻したい人々の思いを受け継ぐことができると思います。そのためにも、自分たちもしっかりと勉強すること、世の中のおかしなところに気づくこと、取組などにも積極的に参加することで、周りの大人の人々にもそのような強い思いなどが伝わっていくと考えました。

第18回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

令和6年（2024年）2月10日発行

編集・発行　北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校内

印　　刷　株式会社　田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町677-2